

白鋤慶福寺「照海の墓碑」について

整理番号 浦和〇五	題額 權大僧都法印照海	題額揮毫 	碑記撰文 	碑記揮毫
--------------	----------------	----------	----------	----------

鐫刻 	撰文建碑年 一八一八・文化二五	住所 桜区白鋤	場所 旧慶福寺	備考
--------	--------------------	------------	------------	--------

一 はじめに

本石碑は、慶福寺住照海の墓碑で、弟子たちによって立てられた筆子塚である。

○写真1 墓石正面



○写真2 「碑記」部分



○写真3 住持墓石群の配置と「縁起」の碑



二. 翻刻及び訳注

■ 翻刻

◎ 題字

(正面)

權大僧都法印照海

◎ 碑記

(左側面)

武蔵國足立郡上田谷領之内白楸村
安養山慶福寺住字卓善諱照海出生
越後國頸城郡谷根村前川姓之産也
同郡鉢崎驛於蓮光院道場剃髮授
戒之后經歲功移安永七戊戌年二月

(右側面)

當寺住歲久智山留学八箇年尚
御室宮御法流從金對山林光寺血脈相承
法流開基者寛政八丙辰歲霜月將蒙
大覺寺宮御免許着香衣春秋八十八歲文
化十五寅年正月廿一日亥五剋歿施主筆第六十九人

●異体字

○對 剛。 ○歳 歳。

■訳注

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

武蔵國足立郡上田谷領之内白鋏村、安養山慶福寺住、字卓善、諱照海、出生越後國頸城郡谷根村、前川姓之産也。

同郡鉢崎驛於蓮光院道場、剃髮授戒之后、經歳功移、

安永七戊戌年二月當寺住。

歳久、智山留学八箇年。

尚御室宮御法流、從金剛山林光寺血脈相承法流開基者。

寛政八丙辰歳霜月、將蒙大覚寺宮御免許、着香衣。

春秋八十八歳。文化十五寅年正月廿一日亥五剋歿。

施主筆第六十九人

●訓記

武蔵國足立郡上田谷領内の白鋏村、安養山慶福寺住、

字は卓善、諱は照海なり。

越後國頸城郡谷根村たんねに出生す、前川姓の産なり。

同郡鉢崎驛は、蓮光院道場に於いて、剃髮授戒の後、歳を経て功移り、

安永七戊戌年二月當寺住たり。

歳久しくして、智山に留学すること八箇年なり。

御室宮の御法流を尚び、金剛山林光寺に従ひて、法流を血けちみやくそうじょう脈相承し、開基する者なり。

寛政八丙辰歳霜月、將に大覚寺宮の御免許を蒙り、香衣こうえを着る。

春秋八十八歳にして、文化十五寅年正月廿一日亥の五剋歿す。

施主筆第六十九人

●注

○上田谷領 植田谷本領。

○寺住 住持、住職。寺の主の僧侶。

○越後國頸城郡谷根村 現在の新潟県柏崎市谷根。

○出生 文化十五年八十八歳で没していることから、生年は享保十六（一七三一）年。

○同郡鉢崎驛 鉢崎村は現在の新潟県柏崎市米山町の一部。北陸道の宿駅があった。

○蓮光院 柏崎市米山。現在は真言宗豊山派。江戸時代には、北国街道鉢崎関所に隣接し、

近隣の通行手形の発行も行った。

○安永七戊戌 西暦一七七八年。照海四十八歳。

○智山 真言宗智山派総本山の智積院。京都東山にある。

○御室宮 御室は宇多法皇が仁和寺に建てた僧坊で、後に仁和寺の雅称となった。仁和寺

は真言宗御室派の総本山。江戸時代は皇族出身者が住持をつとめる門跡寺院であった。こ

ここで御室「宮」と表記するのはそのためではないか。

○御法流 法流は、正法（正しい真理の教え）が相続して絶えないことを水流にたとえていう。御は、敬辞だろう。

○金剛山林光寺 植田谷本の真言宗智山派金剛山林光寺。

○血脈相承 師匠と弟子の間で法を相続すること。

○開基 寺院を創建すること。

○大覚寺宮 大覚寺は京都嵯峨の真言宗大覚寺派の総本山。江戸時代は門跡寺院であったため、ここでは大覚寺宮と表記しているのだろう。

○香衣 香木の液汁で染めた勅許の色衣。

○寛政八丙辰 西暦一七九六年。照海六十六歳。

○霜月 陰暦十一月。

○八十八歳 逆算すると照海の生年は、享保十六（一七三二）年。

○文化十五寅年 西暦一八一八年。

○亥五刻 亥の時は、午後十時から十二時までの間。刻は刻。漏刻による定時法で、一日を百刻に分ける。一刻は十四分二十四秒。五刻は、七十二分。亥の五刻は、午後十一時十二分頃となる。

●口語訳

武蔵の国の足立郡植田谷領内の白鋤村にある、安養山慶福の寺住は、字は卓善、諱は照海である。

越後の国の頸城郡谷根村で出生した、前川姓の産である。

彼は、同郡鉢崎驛の蓮光院道場において、剃髪授戒して仏門に入った。その後、年月が過ぎ、様々なことがあって、安永七（一七七八）年二月に、当寺の寺住となった。

それから何年か経って、真言宗智山派の総本山である智山に八年間留学した。

彼は、御室派の正法を重視し、植田谷本の金剛山林光寺より、正法を相続し、寺院を開基したのである。

寛政八年の十一月、大覚寺宮の免許を受け、勅許の香衣を着る栄誉を賜った。

八十八歳のとき、文化十五年正月二十一日、午後十一時過ぎに亡くなった。

本筆子塚の施主は、筆弟六十九人である。

三. 資料

(一) 「新編武蔵風土記稿」巻一五四 足立郡之二十 植田谷領

◎白鋤村・寺院

○慶福寺

「新義真言宗、植田谷本村林光寺の末、安養山と號す、本尊弥陀」

(二) 「武蔵國郡村誌」卷之十一

◎白鋤村・仏寺

○慶福寺

「縦拾三間式分五厘横廿三間八分面積三百六拾七坪村の南方にあり新義真言宗本郡植田谷

本村林光寺の末派なり」

(三) 墓石近くに立つ「縁起」の碑(空格を□で示す)

◎正面(空格は□で示す)

安養山慶福寺墓地縁起

当山ハ文化年間ノ創立デ□本寺ハ植田谷本村ノ金剛山林光寺デ元ハ京都御室ノ仁那寺派ノ寺院デアツタガ後武家政治ノ擡頭ニ伴イ皇室ノ財政援助ガ少クナリ現在ノ智山派ニナツタトイワレテ居リマス□当寺ハ創立当時カラ祈願寺トシテ親シマレ土地ノ住民ノ教育ト布教ヲ専ラトシテイタ模様デ特ニ代々ノ住職ノ墓石ノ中デ二番目ニ古イ照海和尚ハ長イ間京都デ修行シ故郷ノ越後ニ帰ラズ当寺ニ於テ地域住民ニ学問教育ヲ施コサレ地域発展ノ爲ニ盡サレタ和尚デ教ヲ受ケラレタ住民ハ七十名近クイタトユウ事デ其ノ治績ハ墓石ニ細カク刻マレテ居リマス□代々ノ墓石ハ当時教ヲ受ケタ筆子衆ガ建立シタモノデアル事デモ伺ガウ事ガ出来マス本尊ハ阿弥陀如来ト不動明王、開山佛ガ祭ラレテ居リ現在還暦ヲ過ギタ住民ノ方々ハ夏冬ノ休ミニハ皆自主的ニ集マリ勉強シ其ノ靈験ハアラタカダツタトイワレテ居リマス

昭和六十一年十一月一日

世話人

武井 忠太郎
菅内 秀道
田中 喜作
戸張 與喜知

四. 主な参考資料

① 翻刻

・埼玉県教育委員会 『埼玉県教育史金石文集 上』(埼玉県教育委員会、一九六八)

以上

二〇二四年一月 薄井俊二訳す